

ここで別れなければならぬさだめでした。そして、夕もやに消えるまで、ずっとうつと見おくりしました。使用人たちは、山の中ふくのさだめの場所に、娘の入った長持をおろすと、うしろもみずに、ほうほうのていで山をかけおりました。

そして、娘はうわさをきいてかけつけた、例の旅の行者から、「あなたは、観音さまのさずけ子であるいじょう、親の不心得のつみを受けるわけがない。心配しないで心静かに、これをよみ続けなさい。必ず、その功德によって助かります。」と、わたされた一卷の観音経を、すべてあきらめていたときであり、わらをもつかむ思いで一心によみ続け、長持に入ってから、おぼえた一節をくりかえしくりかえしとなえ続けました。

しかし、夜もしだいにふけ、三更、四更（今の午後十一時から午前三時ごろ）とたつていきましたが、別に変ったこともなくシーンと外は静まりかえっていました。娘は、おそろおそろの中からそおつと長持のふたをあけると、外はすがすがしいほどの朝明けでした。「助かった。ありがたいありがたい。」と、観音さまに感しやすくと、